

第11回 斬新な歌謡曲を誕生させた 東芝と永六輔ら放送作家

かつてダークダックスやデューク・エイセスによって「光る 光る 東芝 回る 回る東芝 走る 走る 東芝 歌う 歌う東芝」と歌われた東芝のCMソングは、『東芝日曜劇場』や『きょうの出来事』の冒頭で流れていました。テイチク・レコード所属だったダークダックスでしたが、CM製作時はまだ東芝レコード（以下、東芝）発足前だったこともあり、のちに東芝所属のデュークと交代します。

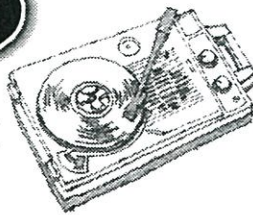
昭和の歌謡界をリードしてきた戦前からのレコード会社、コロムビアビクター、ポリドール、キング、テイチクに対し、東芝は昭和35年に東芝音楽工業として発足した後発の会社でしたが、私が小学生だった頃は大好きな坂本九やクレージーキャッツのシングル盤にロゴマークが印刷されているレコード会社であり、中学生だった頃はベンチャーズやピートルズの洋楽系に加え、人気絶頂のスター・加山雄三も東芝だということ、(ここ)はほかのレコード会社

とは何か違うぞ」という思いを抱かせる存在感がありました。その後、GSやカレッジフォーク

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎 浦
絵・松本



などのブームを経て、荒井由実から始まる（と私が思っている）ニューミュージックの時代に至るまで、東芝系のアーチストに対する注目は続きました。

発足当初の東芝は、新参ゆえに歌手も作り手も手垢のついていない人物を登用せざるを得ず、結果的に既存の歌謡界にはない斬新な企画や歌を誕生させることができたのではないか。『スーダラ節』も『上を向いて歩こう』も、こうした背景があったからこそ誕生したのではないかとともに昭和36年発売。

右記の歌を作詞した青島幸男も永六輔も本業は放送作家であり、作曲の萩原哲晶も『黒い花びら』以前の

中村八大もジャズ・ミュージシャンであり、歌謡界にとってはよそ者でした。

この4者は、フリーランスにもかかわらず、その後も東芝所属の歌手に作品を提供し続けることになりました。私は、青島・永に前田武彦を加えた3人を「東芝レコードを支えた三大放送作家」と称しています。

ベンチャーズ・ブームが続く中、昭和41年秋、山内賢と和泉雅子のデュエットソング『二人の銀座』が東芝から発売されました。

当時、和泉の歌唱力について酷評する人もいましたが、ニキビ面だった半世紀前の男子中学生は違いました。初めて耳にしたときから、（これは『いつでも夢を』や『星空に両手を』『わが愛を星に祈りて』のデュエットとは違うぞ。作曲がベンチャーズか、作詞も永六輔、九ちゃんの『上を向いて歩こう』だ。やっぱりそうか、東芝か。いかすなあ）と、この曲のとりこになります。

和泉の音程の揺らぎ、際立つ息継ぎさえ新鮮に感じ、見つめ合って歌う山内と和泉の映像が東芝製のテレビに映し出されたときは、うれしきで「T o s h i b a」の傘のロゴマークも光り輝いて見えたものです。